

学生支援の現場から

◆八戸工業高等専門学校
八戸高専の学生たち

浦西 和夫
学生主事（副校長）
（八戸工業高等専門学校）

社会のニーズに対応できる学生に成長してもらおうという観点から、全国の学校では様々な試みが行われている。高専の場合には、就職した企業などにおいて力を発揮できる素養を持った学生であると考えられる。これは、製造メーカなどの技術者として生活の糧を得るための要件であるが、人生を考えたとき、全人格的な成長も不可欠である。また、社会・経営問題から技術問題まで幅広い領域において指導力を発揮するスーパーエンジニアという概念があり、その根幹として技術者としての倫理観を持つことも重要なことである。一方、学生すべてがスーパーシューテントではありえず、多様な学生が混在し、時代を経るに従い理想と現実のギャップは拡大の一途を辿っている。

高専ではプロフェッショナルになるための授業は勿論であるが、人格形成を促す正課外活動が教職員の手厚いサポー



男子バレーボール部—全国高専大会 3位

ていくべき時が来ているのを実感している。

このような状況の中、八戸高専では、平成一九、二〇年度「地域資源と学寮を活用した人間力の育成—国際エネルギー開発拠点等との連携による統合的學生支援メンタープログラム」の名称で社会的ニーズに対応した学生支援プログラムが動いている。英語コミュニケーション

ション力の育成として、三沢米軍基地内の学校（エドグレン高校）との間でロボコン出前授業や吹奏楽部の演奏、エドグレン高校生の校内球技大会参加や高専祭開催時の訪問など行っている。各界で活躍している卒業生と寮生を中心とした学生との講演会などによる交流、先輩・後輩のペアリングによる勉学支援、さらに部活動や各種コンテストの支援などにより、学生の成長支援を活発に行っている。



自動車工学部—エコランリッター1000kmを2年連続突破

る。方向性が定まり、共通の土俵に乗っていた時代、意思の疎通は割合簡単にでき、さほど必要としなかった学生と教職員のコミュニケーション／連携が、今、重要となっている。お互いにその時間をどのように作るかを真剣に考え

トの下に行われている。一六歳から始まる高専生は、自我の確立期でもあり、自由と責務の間で試行錯誤が見られ、色々なトラブルも発生している。「こうあってもらいたい」と学生自ら「こうしたい」ということとの間にずれが存在し、特に低学年では、経験が少ないことから自分の好き嫌いという感情を頼りに行動を決めることが多くな



英語力—エドグレン高校との交流



卒業生との交流—講演会